特集：元気な中小企業訪問記X

第４章
尾鷲ヒノキの山が創る日本林業の未来

三重県北牟婁郡　速水林業

鱧谷　友樹
大阪府中小企業診断協会

会社名	速水林業
代表	速水　亨
従業員	15名
所在地	三重県北牟婁郡紀北町海山区引本浦345
URL	http://www.re-forest.com/hayami/index.html

速水亨氏。長年，日本の林業界をリードしてきた

はじめに

2020東京オリンピック・パラリンピックの新国立競技場，スターバックスのペーパーカップ，英国ウィリアム王子のロイヤル・ウェディングの招待状，G７伊勢志摩サミット2016の首脳会談で使用された机と椅子――。これらに共通するものが何かおわかりになるだろうか。それは，FSC 認証の木材，紙が使用されているということである。

FSC 認証とは，①森林の環境保全に貢献していること，②地域・社会の利益にかなっていること，③経済的にも持続可能な形で生産されていること，の３つの条件を満たした森林や流通加工プロセスに与えられる国際認証のことである。

地球規模での環境問題が深刻化する現代において，社会的責任を果たす企業や個人が認証付きの木材や紙を選択することは，一定の常識となりつつある。

このFSC 認証を日本で初めて取得した林業家を三重県尾鷲に訪ねた。代々，尾鷲で林業を営む速水林業の速水亨氏である。

先に述べた伊勢志摩サミットの家具一式には速水林業のヒノキが使われている。取材に訪れた日も，2020東京オリンピック・パラリンピック用の木材が搬出されていた。

１．やせ地が育む多様性豊かな森林

尾鷲地域は，紀州藩の産業政策によって，1624年（寛永元年）から人工造林が開始され，1700年代半ばには本格化した。速水林業が創業したのは1790年（寛政２年）で，1953年生まれの速水氏は９代目に当たる。

熊野灘に臨む急峻な地形と多雨な気候が特徴で，土壌が流出しやすく年間の木の成長量は少ないが，良質な木材の生産地として古く

から有名である。特にヒノキは「尾鷲ヒノキ」と呼ばれ，色つやの美しさや強度に優れており，市場でも高く評価されている。

FSC 認証マークが付いた速水林業の尾鷲ヒノキ。年輪が均一で緻密である（写真提供：速水亨氏）

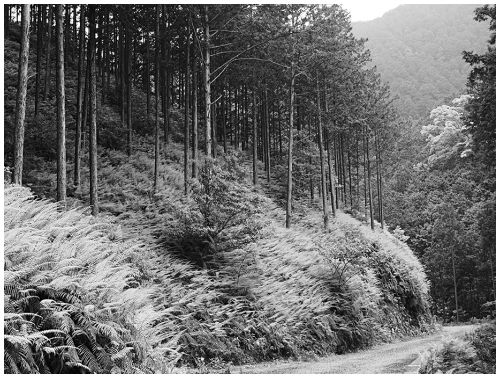
速水林業では戦後，先代の父・速水勉氏の「やせ地である尾鷲の山で林業を続けていくためには，森林土壌を大事にしないといけない」という思いがあり，下草を生やして土壌の流出を防いだり，針葉樹よりも根が深くまで伸びる広葉樹をわざと残し，養分の循環を良くしたり，という施業が行われてきた。

一方，世界的には，酸性雨による立ち枯れなど工業化社会の被害者とされていた森林が，1992年には地球サミットで「持続可能な開発」がテーマとなるなど，林業自体が生物多様性や環境保全に配慮すべき主体者であると見なされるようになってくる。

ヨーロッパやアメリカを頻繁に訪れ世界の潮流を肌で感じていた速水氏は，これからは環境を大事にする林業の時代になると思ったという。そして，環境を大事にする林業というのは，「視点を変えただけで，父が目指していた土壌を豊かにしようという林業と同じだった」。こうして天然林よりも生物多様性に富む，速水林業の人工林が親子２代にわたって造られてきた。

そんな中，全国森林組合連合会の専務理事から，環境マネジメントシステム ISO14000を森林に適用させるための国際会議に参加してくれないか，と声がかかる。1998年のことだ。当時，環境に配慮した林業を打ち出しているのは，全国を見渡しても速水林業くらいであったことから白羽の矢が立った。

その国際会議の場で，FSC 認証という第三者認証制度を知ることになる。ISO14000は環境対策を継続的に改善していくシステムを評価する制度である。国内では第三者認証を理解する者はまだ皆無で，帰国した後に林野庁と掛け合って，調査の予算を組んでもらった。その後，環境 NGO の力を借りて，森林認証の情報を集めたところ，FSC 認証はISO14000と異なり，人権や環境対策がなされた森林そのものを評価する認証であり，この点において FSC 認証の考え方は速水林業の経営そのものではないかと考えた。そして，2000年，速水林業の経営が認められ，日本初の FSC 認証を取得することができた。



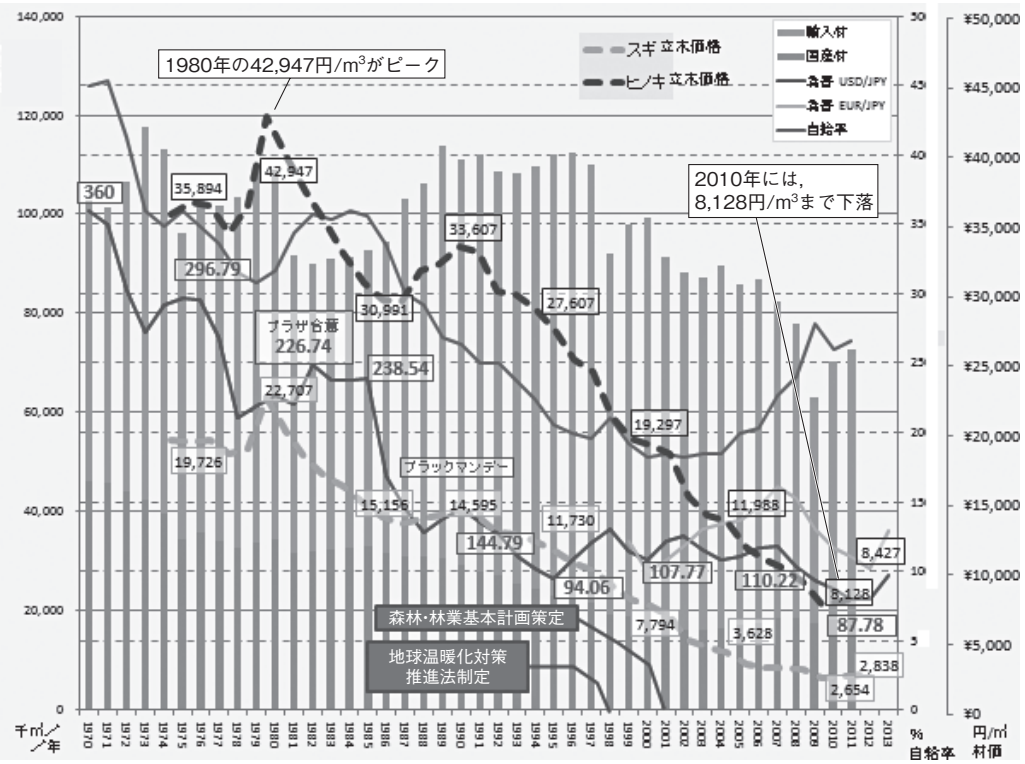
林床のシダが美しい。右手奥にはクスノキの大樹も

もっとも，当時は世界的にも人工林の認証実績がほとんどなく，審査項目も整備されていなかったため，外国人審査員へ説明するための資料は，速水氏自身がフォーマットを考え，データを揃え，英文で作成したという。大変だったのはそのときくらいだ，と事もなげな顔で話されていたのが印象的だった。

２．経費が回収できないという現実

FSC 認証の取得により，速水林業の経営がメディアで取り上げられ，山林の見学者も増えた。しかし，木材価格の急激な下落にあらがえるほどの付加価値とはならなかった。

図表　立木価格と為替相場の推移



出典：林野庁（2012）「森林・林業白書」データより速水亨氏作成

図表はスギ，ヒノキの立木価格と為替相場の推移および自給率をグラフ化したものである。2010年のヒノキ立木価格は8,128円 /m³となっており，ピーク時の42,947円 /m³と比較すると５分の１以下である。これほど価格が下落した要因としては，長期的な円高以外に，1997年に採択された京都議定書の影響が大きいと速水氏は分析している。

京都議定書で日本が負った６％の温室効果ガス削減目標のうち，3.8％を森林吸収量で負担するべく，間伐を促進する政策を政府がとったためだ。石油化学製品や鉱物資源などの代替品の登場や新設住宅着工戸数の減少で木材需要が減少傾向にある中で，需要を超える間伐材がマーケットに溢れ，タダのような値段になってしまった。

国産材を使おうという取組みはさまざまに行われているが，全体として経費も回収できないような価格が依然として続いている。

３．先例がないなら速水林業が作る

こうした厳しい経営環境下において速水林業が雇用を維持し経営を続けてこられたのは，枝打ちや間伐などによる太陽光の管理技術によって高品質な尾鷲ヒノキを生産してきたからだけではなく，徹底した生産性向上に取り組んできたことが大きい。

速水林業の山では，さまざまな高性能林業機械を導入して作業効率を上げてきた。多くは速水氏が海外で買い付けてきたもので，カスタマイズや修理はすべて自前で行う。

機械の購入で最も大事にしていることは，機械が自分の山で働く姿がイメージできることだ。日本に３台しかないイタリア製のスキディングローダー（集運材車両）は，メンテナンスを続けながら，３台とも速水林業で活躍している。「オーストラリアの砂漠のモー

テルで，ジャグジーに浸かりながらペラペラとめくっていた雑誌にイラストがあった。それが速水の山で動く姿がイメージできたから，その足でイタリアへ行って商談を成立させた」という話は今でも語り草である。

また，こうした機械の活用や作業効率化の前提となるのが，林道や作業道の開設である。近年では林野庁もこうした道路網整備を進めているが，速水林業では1961年から49km も独自開設してきた。このときに切り出された廃土は，将来を見越してストックヤードを造成するため，沼の埋め立てに使った。今はこのストックヤードで，搬出した原木の一時保管や造材，皮むきなどの作業のほか，仲介業者が訪れて仕分けを行うなど，林地から搬出した後の作業を集中的に管理，実施している。

4．林業は稼げるビジネスである

日本では，苗は苗木屋から調達するのが一般的だそうだが，速水林業では自前で育成している。同社の管理責任者である川端康樹氏に苗畑を案内していただいた。

速水林業の苗木は実生（種）からではなく，挿し木で作る。生分解性ポットに穂を挿して，苗畑で半年ほど置けば，山へ植えられる状態となる。施肥も水やりもほぼ不要だ。長年の試行錯誤から，１年を通していつ山へ植えても木の生長は変わらないことがわかっている。

挿し木は母樹と同じ遺伝子を持つので，生産する材の色合いや品質をコントロールできる。それにより，たとえば全国の神社からの「伊勢神宮の御料林と同等の木が欲しい」という要望に応えることも可能となるのだ。

また，地域の生育条件に応じた優秀な遺伝子の木を選別できれば収支改善にも寄与する。１ha からおよそ25万本の挿し穂が取れると想定すると，１本約５円の相場換算で，125万円の追加収入が見込める。これで植え付けと下刈りの経費を賄えば，補助金なしでも成立する新しい林業のビジネスモデルが構築できると考えている。

5．地域社会に根差す

旧来の林業が儲かった時代は過ぎ去って久しい。速水林業でも木材価格の低迷との戦いは続く。しかし，マクロな視点で世界に目を向ければ，森林は安定成長する資産として，あるいは ESG（環境・社会・ガバナンス）／SDGs（持続可能な開発目標）投資の観点から注目が集まっている。一方，ミクロな視点で地元のマーケットを見ると，ニーズにきめ細やかに対応した造材や出荷を心がければ，付加価値を上げられることもわかってきた。山側が価格影響力を持ち，国産材の自給率を高めれば，日本の林業再生も夢ではない。

「林業を続けるために努力をしてきた，ということが大事で，その結果としてうまくいっただけ」と速水氏は表現するが，それは「いかに儲けるか」ではなく，「いかに地域社会の中でサステナブルか」を大切にしてきた結果であろう。速水林業が昔も今も林業界のトップランナーであり続けられる理由は，前衛的な取組みの背景にこうした価値観が力強く根付いているからだと考える。

「林業には社会性があると思っているのです。山を背負っては逃げられませんから。だから，地域住民に愛される森林であること，従業員が地域で幸せに暮らせる居場所として速水林業があることが一番大事なのです」

取材で訪れた尾鷲の山には，地域に根付く元気な中小企業の理想の姿があった。

鱧谷　友樹
（はもたに　ゆき）
大阪府出身。京都大学大学院農学研究科修了後，電機メーカーのシステム関連会社に勤務。原材料・資材調達の基幹システム構築および導入支援を行う。